

研究報告

イギリス調査旅行の思い出

馬淵 彰

2008年度日本大学学術研究助成金により、2008年7月21日から8月5日にかけてイギリス各地の資料館をめぐり、史料調査をおこなった。この調査旅行に関しては、本学会2008年9月の大会（青山学院大学にて）で簡単に報告させていただいた。その後の本学会役員会の意向に添い、大会での報告内容を多少修正し本誌に掲載させていただき運びとなった。メソジスト運動史に関わる今回の調査旅行での筆者の個人的体験や想いが、本誌を手にする方々に何らかの形で役に立てば幸いである。

州立資料館にて

上記の研究助成金は、イギリスの全国農業労働者組合（1872年～1896年）とキリスト教諸教派との関連性の研究に対して授与された。この同一のテーマでは、イースト・アングリア地方の農業労働者の組合運動でメソジスト派が重要な役割を果たしたとした N. スコットランド博士の説（*Methodism and the Revolt of the Field*, 1981）が有名だ。筆者は、彼の説の再検討のため、すでに2回調査旅行を済ませている（2007年1月にノーフォーク州立資料館を中心に、2007年7・8月にケンブリッジ州立資料館を中心に）。3度目にあたる今回の調査旅行では、イースト・アングリア地方にとっては辺境に位置するリンカンシャー州とエセック州、ケント州のそれぞれの州立資料館およびその分館（Lincoln 市と Chelmsford 市、Maidstone 市、Sevenoaks 市）で史料調

査をおこなった。

焦点は、1870年代初頭の同地域でのメソジスト諸派の所在地の確認である。1851年の国勢調査のデータに基づくレディー・メード的な二次資料もいくつかあり、それらはメソジストの地方史にとってとても役立つ。しかし、筆者の研究対象の時期よりも20年近くデータが古く、精度において不安が残る。メソジスト派の各派の年会議事録によって、各地の巡回区（サーキット）は容易に判明する。だが、それぞれの巡回区の下部組織である教会や礼拝所・集会場などローカル拠点の所在地は Circuit Plan や Circuit Schedule Book、Station (circuit) Report、Register of Marriage、Baptismal Register of Circuit によって調べなければならない。これらの史料は、マンチェスターのジョン・ライランズ図書館ではほとんど入手できない。なぜなら、各地の州立資料館に保管されているからである。

筆者が Ph. D. 論文作成でイングランド南部を調査した時でもそうであったが、上記のメソジスト派地方史料の欠落は少なくなく、特にプリミティブ派のものは欠落が多い。史料が欠落している場合には、当時の住所人名録 (Directory：今日ではインターネットによりレスター大学の Historical Directories で一部閲覧可) や各地方教会作成の記念冊子、郷土史家作成の研究冊子などを地方資料館で閲覧し、ローカル拠点を一つずつピック・アップしていくしかない。1994年～2000年の筆者のイギリス留学時では、この作業のために各地に数日間滞在せざるをえなかった。数年前からはデジタル・カメラでの史料撮影が大半の州立資料館で許可されるようになり、資料館での作業時間が短縮された（次々と史料を求められる資料館側の職員の方々は大変となったが）。たとえば、エセックスでは10ポンドで丸一日の撮影許可がおける。今回は、成田空港で購入した2GBのフラッシュ・メモリに史料をすべておさめ、史料分析はすべて帰国後にまわせた。

プリミティブ派の「巡回区報告書」はローカル拠点の確認以外にも、各地の会員の増減やその理由、地方の独自の課題などの報告があり、各地のメソジスト・コミュニティの特色の理解に役立つ。「結婚記録」や「巡回区洗礼記録」には、住所以外に新郎・新婦の年齢や職業、彼らの父親の職業、受洗者（幼子）の親の職業の記載があり、各地のコミュニティの主要構成員の職

業上の特性を推測できる。たとえば、今回閲覧したプリミティブ派チェルムスフォード&モールドン巡回区の洗礼記録[CHEFMSFORD C.R.O. D/NM 5/3/87]では、19世紀半ば頃では親の職業で賃金労働者や職人層 (labourer, bricklayer, seaman, carpenter, mariner, shoe maker など) の記載が目立つが、第一次大戦後 (メソジスト他派との合同後) の戦間期ではホワイトカラー層 (bank clerk や insurance agent など) も記載され始めていた。まじめなメソジスト信徒は社会の階段を上昇するとの通説をこの史料も裏付けているとの印象をうけた。

ロンドン博物館にて

エセックス州とケント州の資料館へはロンドンのホテルを拠点に通った。写真は、ロンドン滞在中にロンドン博物館を訪ねた際、その正面入り口で撮影したメモリアルである。この碑の傍にはプレートがあり、次のように記されている。〔 〕内は筆者による補足。

ジョン・ウェスレーの回心の地メモリアル—オルダスゲートの炎 (Flame)—は、1981年、ここ**現在の**ネルトン・コート高架歩道の位置に据えられました。このメモリアルは、18世紀オルダスゲートの旧ネルトン・コートの道路に接した高さでの、ジョン・ウェスレーの実際の回心場所に可能な限り近い場所を示しています。……メモリアルの表側には、ジョン・ウェスレー日記初版のオリジナル印字テキストに記されていたとおりに、1738年5月24日水曜日のジョン・ウェスレー回心日の出来事についてのジョン・ウェスレーの記述を模写・拡大し青銅に铸造された抜粋があります。説明や解説などは、まったく施されていません。……ウェスレーの回心の地メモリアルは、Methodist Church Purposes 委員会の保護管理財産です。……この〔プレートの〕解説の写しは、ロンドン博物館の館長の好意的な承諾のもと、〔ロンドン博物館〕フロント・デスクで入手可能です。

ロンドン博物館は、オールド門(Aldgate)があった場所の近くに建てられている。その門は、古代ローマ人の都市(civitas)ロンドン(Londinium)を外敵から守った北側の市壁に設けられていた(3世紀)。この門の近くに、もう一つ別の門があった。それは、4世紀ごろのサクソン人の攻撃から都市を守るために古代ローマ末期軍事様式で造られたオルダス門(Alders Gate)である。オルダス門は、古代ローマ末期の(グレゴリウスによるアングロ・サクソン布教以前の)同地のキリスト教文化のフロンティアローマ人キリスト教徒の信仰生活と祈りの場一の防衛を託された。オルダス門は1666年のロンドン大火で失われたが1672年に再建され、1761年の交通路整備での撤去まで存在していた。

奇しくも十数世紀を経てその異民族の子孫と目される一人の人物がこの門のそばで、使徒パウロからローマ人信徒に宛てられた書簡への解説を聞き心燃やされた。彼の体験を待っていたかのように門は取り除けられ、彼の想いはその都の境界線を遥かに越え、洋の東西へと響きわたっていく。彼のその心の体験がまさにこの場でなされた故に、21世紀に生きる人々もこの都市の歩みを振り返る際、その第一歩めで彼の日記のその巨大なメモリアルを見上げさせられる。「古代ローマ・キリスト教世界の砦」＝「ウェスレーの回心の場」＝「ロンドン博物館の正面入口」；この深遠で不思議な歴史的巡り合わせに身体が震えた。

ジョン・ウェスレー回心の地メモリアル



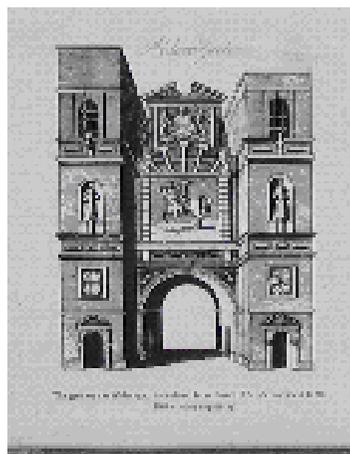
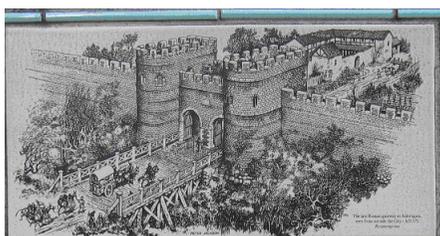
(左上) ロンドン博物館入り口。写真右手奥に、メモリアル

(右上) メモリアルを説明する現地のツアーガイド



(上) メモリアルの一部。 'I felt my Heart strangely warmed.'

(左下) 古代ローマのオルダス門。(右下) 18世紀のオルダス門



(撮影：馬淵 彰)

ジョン・ライランズ図書館にて

今回の調査旅行では、ジョン・ライランズ・マンチェスター大学図書館 (Deansgate) も訪問した。その目的の一つは、同図書館所蔵のメソジスト史料カタログ購入である (発売窓口はマンチェスター大学構内のメインの図書館)。 *The Wesley Family Papers* (3 vols.) や *Early Methodist Personal Papers* (1750-1850)、 *Handlist of Methodist Tracts and Papers* など 20 種類以上の史料カタログをほぼすべて購入した。

カタログには、各史料からの抜粋やアーキビストによる説明があり、手書きの史料の読解に不慣れな者にとっては計り知れない助けとなる。これら

のカタログにより、同図書館訪問前に閲覧の必要な史料を絞り込んでおくことが可能だ (Deansgate の図書館は自分のデジタル・カメラでの史料撮影は不可。2007 年時点)。

カタログの利便性の一例として、チャールズの妻サラ (1726-1822) から娘サリー (1759-1828) への手紙 (DDWF/21/21) を取りあげてみる。

ケント州メイドストンのトマス・レディアード宅のサリー・ウェスレー宛て。チャールズ (チャールズの次男:1757-1834) は幼いチャールズ (1793-1859) の手紙 [参照 DDWF/16/1] に大変喜びし、クリスマスに甥が滞在できるよう最善を尽くそうとしている。その子の父親 (チャールズの末子サムエル:1766-1837) は、サラが「彼の指示とは反対に」子供を甘やかすのでサラと一緒に居させるよりも別の場所に居させたいと主張し、始末におえなくなっている。……

[1804 年] 5 月 24 日 * () 内は、馬淵による補足説明。

この史料には、上記の説明が *The Wesley Family Paper* (Vol. 1) p. 93 にある。音楽家として有名なチャールズの末子サムエルと妻シャルロットとの結婚生活は破綻していた。ともに生涯独身であり仲が良かった兄チャールズと姉サリーは、甥チャールズをはじめシャルロットがサムエルに産んだ三人の子どもたちを育て上げる。伯父チャールズから幼い甥への愛情をこの手紙から誰もが感じられるであろう。伯父チャールズは、信仰への強い熱意は見せないが、おっとりした性格で人が良い。音楽の才能は弟に劣らず、ジョージ三世やジョージ四世に演奏を請われ続け、演奏中ジョージ三世自ら傍らで譜面めくりをしたこともある。「ウェスレー家の者はいらない」とセント・ポール大聖堂から拒絶されるなど職を得ることで苦勞した彼だが、晩年はメソジストの集まりで慰めを得ている。また、この史料の説明によれば、サラは、親に反抗的だったサムエルからでさえ、孫に甘すぎると言われていたようで面白い。

上記の説明で言及されている史料 [DDWF/16/1] は、幼いチャールズの手紙である。次のような説明がカタログに添えられている。

サムエルと祖母サラ・ウェスレーの贈り物への感謝の気持ちをこめて、ケント州メイドストンからロンドン・チェスタフィールド通りのサムエル・ウェスレー宛。彼は、休暇の期間に家に帰りたがっていた。あるいは、少なくとも、学校に留まらなくても良かった。もし彼の父が許してくれるなら、伯母 [サリー・ウェスレー] が喜んでロチェスターからロンドンへと彼に付き添ってくれる。……1804年5月26日。

ここからは、当時9歳の幼い甥への伯母サリーの豊かな愛情が感じられる。サリーは、W. ウィルバーフォースやソークトン夫妻らなどイギリスで影響力を發揮したクラップム派関係者からの財政援助を受けていた母サラとともに暮らし、晩年でもメソジストのクラス会員として誠実に協力した。幼いチャールズらがこの伯母や伯父や祖母に手をひかれ、メソジスト集会に出席したこともあったのだろうか。ウェスレー家のレジェンドを背負い、互いに身を寄せ合った彼ら・彼女らの（今日の我々の目には）小さな存在も、メソジスト・コミュニティ内外の人々との絆を結び、メソジスト運動を支えていた。この幼い甥は、ヴィクトリア女王のチャプレンとその後なる¹。

史料カタログの説明だけからでさえ、メソジスト運動に関わった一人ひとりの日常的な問題、そしてその問題への取り組みが分かり、メソジスト運動の奥行きを垣間見たり想像できたりする。スザンナの教育精神はチャールズの家族にどのように伝わったのだろうか。ジョン・ウェスレーと彼の子どもたち（妻メアリの4人の連れ子）との人間関係なども興味深い（スザンナとメアリの教育方針を比べたこともあったのだろうか）。

¹ この報告では、チャールズ一家の歴史について次の研究に多くを負っている。‘The Cabinet: Memoir of Mrs. Sarah Wesley’, in *The Wesley Banner & Revival Record*, July, 1851 [John Rylands Lib., MARC 2467]; Philip Olleson, ‘The Wesleys at Home: Charles Wesley and His Children’, in *Methodist History*, 36:3, 1998; William J. Quantrille, ‘Sarah Wesley: Woman of Her Times’, in *Proceedings of the Charles Wesley Society*, 1997; Gareth Lloyd, ‘Charles Wesley, Junior: Prodigal Child, Unfilled Adult’, in *Proceedings of the Charles Wesley Society*, 1998.

ジョン・ライランズ図書館 (Deansgate) では、メソジスト教会アーキビストのロイド (Gareth Lloyd) 氏に会えた。図書館の喫茶コーナーでロイド氏からコーヒーをご馳走になりながら対談し、その話の中でウェスレー・メソジスト学会や日本でのメソジスト研究の動向を伝えた。

史料管理者のロイド氏は、もちろん、ウェスレーやメソジスト派のオフィシャルな史料だけでなく、メソジスト派のプライベートな史料にも精通している。ロイド氏の *Charles Wesley and the Struggle for Methodist Identity* (Oxford University Press, 2007) は、J.R. Watson の書評 (*The Proceedings of the Wesley Historical Society*, Vol. 56, Part 4, 2008, pp. 207-209) でも高い評価を得ており、また、筆者もウェスレー・メソジスト学会 2007 年大会 (関西学院大学にて) で紹介した。結婚問題を機にチャールズとジョンが疎遠になっていくプロセスや、英国国教会との問題での両者の対立などに言及しながら、一次資料をふんだんに用いて人間性豊かなチャールズ像を浮かび上がらせていく。当時のメソジスト会員同士の人間関係を分析し、ロイド氏は、チャールズの存在によりメソジスト運動は分裂せず一つにまとまっていたのであり、もし、ジョンが二人いたら大変だったと論じる。もしその点が重要ならば、「メソジストとは何か」への満足な答えは、ジョン一人の分析からでは出てこない。

結びとして

メソジスト運動の精神は今日では世界に広がり、その指導者ウェスレーの生涯は現代でも巨大なメモリアルとして揺るがない。彼の信仰体験や信仰指導、人柄、レジェンドに人々は惹かれる。しかし、それらの人々は、決して同一規格のキャラクターとして把握できるような人々ではなく、多種多様な人生経験や個人的課題、社会的地位、地域的特性、教派的信条などの影響下にある個性豊かな人々であった。筆者は調査旅行を繰り返すなかで、メソジスト運動とは、到底一つの定義におさめられないこのような人々が、ウェスレーの「オルダスゲートの回心体験」に準ずる福音の力を信じ、キリストの主題に導かれつつ主体的に奏でていったポリフォニーのような響きのようなものの気がしてならない。到底一人の研究者の視点で把握できるようなもの

ではなく、研究者同士による情報交換や研鑽が不可欠だ。この点で、日本のウェスレー・メソジスト学会とその参加者に心より感謝している。

全体的な実態の把握は至難だが、確かに響いているこの運動のしらべは、過去に生きた一人一人を理解しようとの不断の地道な努力からのみしっかり聴こえてくるもののように思える。己の学説や己の学術成果、己の教派的立場、己の理論、現代社会への己の使命感も、研究のモチベーションを確かに高める。しかし、メソジスト運動に関わった彼ら・彼女らがどのように生きようとしたのか、何を悩んでいたのかを聞かせてもらおうとの当事者に寄り添う謙虚な姿勢からこそ見えてくる世界があり、この姿勢こそ研究者（殊に歴史学者）には大切だと思う。研究者は、ここに、「隣人を愛せよ」との命令を過去の人々に対しても守れるのではないだろうか。その思いゆえに、自戒の念を込めて、機会が与えられるかぎり今後も調査旅行に出かけたい。

（日本大学法学部 准教授）